

浮世絵で化粧品宣伝！？

下の絵は浮世絵師、歌川広重の作品「東海道五十三次之内 関」（1833年頃刊行）です。副題は本陣早立。本陣の建物に紋入りの陣幕が張り出され、出発前の慌ただしさがうかがえる光景を描いています。ここで、注目したいのは本陣内に掛けられた札、陣幕の後ろに描かれた「かほの薬 仙女香」です。仙女香とは白粉のことで、本来、陣幕の後ろにある札は休泊者である大名の名が描かれるはずですが、広重は化粧品の商品名を描いています。出版文化が庶民にも広がっていく江戸後期、本や浮世絵などから多種多様の情報を得るようになっていきます。『都風俗化粧伝』（1813年刊行）には、「化粧の仕様、顔の作りようにて、よく美人となさしむべし。その中にも色の白きを第一とす。」「いかほど手際よく化粧するとも、白粉ときよう荒ければ、化粧してのち、白粉浮きて粉のふきたるがごとくあらけてのびがたく、光沢を失いて見苦しきものなれば、白粉をとくことを専一とすべし。」とあり、当時の美人の条件は、第一に色を白くすること、化粧の基本は白粉であることが記されています。そんな中、仙女香は浮世絵の思わぬところに度々登場し、その宣伝効果か、仙女香は女性たちに大変人気の化粧品となりました。この様に、浮世絵の細部まで目を凝らすと、面白い情報が書かれていることがありますので、浮世絵を目にする際に、ちょっとじっくりと見てみれば、細部にちりばめられた新たな魅力を発見できるのではないのでしょうか。



東海道五十三次之内 関(保永堂版)